

# Society's Activities

## 平成19年度日本地すべり学会賞受賞者紹介

### 【論文賞】松浦純生氏 (独立行政法人森林総合研究所)

受賞論文「多雪地帯における第三紀層の再活動型地すべりの動態に関する一連の研究」

対象論文

- 1) 松浦純生 (1998): 積雪を誘因とした地すべりの発生予測における諸問題, 日本地すべり学会誌, Vol. 34, No. 4, pp. 39-46
- 2) 松浦純生・落合博貴・竹内美次・梁瀬秀雄 (1992): 豪雪地帯における地すべり自動観測システムの開発, 日本地すべり学会誌, Vol. 29, No. 3, pp. 18-26
- 3) 松浦純生・竹内美次・落合博貴・梁瀬秀雄 (1994): 豪雪地帯の地すべり地における融雪水量の変動特性, 日本地すべり学会誌, Vol. 31, No. 1, pp. 37-44
- 4) 松浦純生・浅野志穂・岡本隆・竹内美次・中村三郎 (1998): アメダス等のデータによる八幡平澄川地すべり発生前の積雪層外流出量の推定とその生起確率, 日本地すべり学会誌, Vol. 35, No. 2, pp. 20-28
- 5) Matsuura, S. (2000): Fluctuations of Pore-water Pressure in a Landslide of Heavy Snow Districts, Journal of the Japan Landslide Society, 37-2, pp. 10-19
- 6) Matsuura, S., Asano, S., Okamoto, T., Takeuchi, Y. (2003): Characteristics of the displacement of a landslide with shallow sliding surface in a heavy snow district of Japan, Engineering Geology 69, pp. 15-35

### ● 略 歴 ●

- 1955年 生まれ
- 1979年 名古屋大学農学部林学科卒業
- 1984年 筑波大学農学研究中退
- 同年 農林水産省林業試験場防災部 入省
- 現在 森林総合研究所水土保全研究領域長



多雪地帯における地すべり研究の難しさの一つに、積雪によって冬期間の観測が制約されることがあげられる。そこで、松浦氏は1987年から旧新潟県東頸城郡安塚町に試験地を設定し、水文・気象環境や地すべり変動特性等の通年観測と通信回線による観測データの収集を開始した。中でも孔内多層変位計を開発し、当該試験地を特徴づける大変位の地すべり移動観測を可能にしたことは特筆される。

観測にあたって夏は落雷による測定器の焼損、冬は機器点検のための雪穴掘りなど苦勞の種は尽きないが、作業のあとに泥と汗を地元の温泉で流すことや名物のそばを食べること(本人は四国の産であるが、どういう訳かうどんよりそばを好む)を楽しみに残された問題解決に向けてつづば試験地を往復している。

このような厳しい環境の中でこれまで観測が継続できたのは、多くの関係機関の理解や協力に加えて、地域の安全・発展に貢献するという学生時代に経験したネパールにおけるボランティア活動が自称“現場オタク”の原点にあったからではないかと想像している。

これらの現場観測により、最も大きな地すべり変位は融雪期ではなく積雪初期にあらわれ、積雪期間に速減することから、積雪荷重が地すべりの安定性に及ぼす影響を明らかにしたことなどの一連の研究成果は、地すべり危険度の判定や効果的な対策技術の進展に大いに貢献するものと期待されている。

そのほか、長らく委員長を務めていた学会誌編集委員会が本学会の運営功労賞を受賞したことや、理事としての学会運営への貢献などは高く評価されており、今後ますますの学会活動を期待したい。

(竹内美次)

### 【谷口賞】竹内睦雄氏 (有限会社探査環境技術事務所)

受賞対象「長年にわたる地すべり防止技術ならびに関連分野の発展への貢献」

関連論文

- 1) 竹内睦雄 (1985): 電気探査ダイポール・ダイポール法による地下浅部探査, 土と基礎, Vol. 33, No. 7, pp. 29-32
- 2) 竹内睦雄・長柄亮二 (1990): 電気探査による地下水流動モニター法の研究, 応用地質, Vol. 31, No. 1, pp. 12-18
- 3) 竹内睦雄 (1999): 地盤調査手法の現状と課題, 農業土木学会誌, Vol. 67, No. 1, 12-18
- 4) 中里裕臣・竹内睦雄・汪振洋・野口徹・井口隆・田中耕平 (2003): 山形県白鷹火山および崩壊源の比抵抗構造, 日本地すべり学会誌, Vol. 40, No. 1, pp. 32-38
- 5) Mi Kyung Park・Mutsuo Takeuchi・Hiroomi Nakazato (2003): Electrical resistivity prospecting for geo-environmental investigation, Exploration Geophysics, Vol. 34, No. 182, pp. 120-124
- 6) 中里裕臣・奥山武彦・黒田清一郎・下川弘晃・竹内睦雄・古谷尊彦 (2005): 長期比抵抗モニタリングにおける地温変化の影響

響, 日本地すべり学会誌, Vol. 42, No. 4, pp. 23-31

- 7) 竹内睦雄 (2006): モニタリング技術の現状と今後の展開, 農業土木学会誌, Vol. 74, No. 11, pp. 1-2

### ● 略 歴 ●

- 1946年 生まれ
- 1976年 早稲田大学大学院博士課程終了 (工学博士)
- 1976年 早稲田大学理工学研究所
- 1981年 農林水産省農業土木試験場 (その後農村工学研究所へ改組) 土地質研究室長, 施設資源部部長等
- 2007年 有限会社探査環境技術事務所技術顧問



地下の様子を知ることは地すべり調査の基本である。地質調査にたずさわっている人ならだれでも、健康診断で行っているCTスキャ

ンのように地すべり断面を透視できればと思うだろう。竹内氏は、今では、地すべり調査で普通に行われている高密度電気探査で地すべりを可視化した草分け的な人です。氏は大学で資源工学を専攻し、鉱床の探査のための電気探査法について学位を取得し、農林水産省の農業試験場(現在の農村工学研究所)に入省した。それ以来、30年近く、土地質調査に物理探査を適用する方法に関する研究と農業用施設の設計・調査研究の管理にたずさわってきた。

氏の電気探査の特徴は、垂直断面内の比抵抗値をメッシュで捕らえるダイポール・ダイポール配置法である。この探査法が鉱床探査以外に使えるという実証が無かったので、地すべり調査、地下水調査、地熱調査など、あらゆる土地質調査に適用してみた。また、地すべり地のように低比抵抗の地盤で、深度数百mまで測定するために、電源容量の大きな測定器の開発も同時に進めた。その極めつ

### 【研究奨励賞】(社)日本地すべり学会新潟支部

受賞対象「中越地震の地すべり災害に関する一連の調査研究活動と成果」

この度は平成19年度(社)日本地すべり学会研究奨励賞を受賞することができ、新潟支部一同、大変嬉しく、また大変誇らしく思っております。また、新潟支部の活動に光を当て、選考して下さった表彰委員会の皆様に紙面を借りてお礼申し上げます。

周知の通り、平成16年10月23日に新潟県中越地震が発生し、旧山古志村に代表される中越地域の中山間地は未曾有の地すべり災害に見舞われました。従来の被害地震に比べ、中越地震の最も象徴的な現象は、地すべりの多発にあったと思います。災害発生直後より、関連諸学会の調査団が現地に入り、地元の大学・研究機関は、報道機関からの問い合わせに加え、諸学会調査団の宿所手配や連絡調整にも多くの時間が割られることとなりました。(社)日本地すべり学会も応用地質学会と合同調査団を組織しましたが、被災地近郊の宿泊施設は全て営業を停止しており、また新幹線も新潟-湯沢間が不通であったため、湯沢町に陣を構え、調査にあたりました。一方、豪雪の冬期が差し迫っていることもあり、地元の行政機関及び民間調

査社は災害対応・被害調査業務に忙殺されました。このような状況の下、地震直後に新潟支部として組織的な取り組みを行うことには自ずと限界がありました。しかしながら、地震から2ヵ月が経過した平成16年12月24日の支部役員会の実施から平成17年5月のシンポジウムを発端に3年間にわたり計6回のシンポジウムおよび現地検討会を行い、中越地震による地すべり災害を取り上げてまいりました。

中越地震の発生前までは専門家の間でも「地震時には斜面崩壊は発生するけれども、地すべりは発生しない」という説が受け入れられていたように思います。地震時地すべりの素因や発生機構のみならず、緊急対応や対策に至るまで、中越地震から学ぶことは数多いと思います。年を追うごとに中越地震への関心が薄れてまいりましたが、新潟支部はある種の使命感を持って中越地震による地すべり災害にこだわり続け、頑なに取り組んでまいりました。研究奨励賞という形で支部の活動を評価していただき、改めて感謝申し上げます。

(今泉眞之)

(渡部直喜)